

高校生ロシア語学習者が同年代のロシア人と出会う機会を模索して —東京都内でロシア語を学ぶ生徒たちとの取り組みを例に—

福田 知代

はじめに

現在、公立の小学校の授業でも英語活動が行われるようになり、日本で生活する子どもたちの大半に、早い段階から外国語に触れる機会が提供されることとなった。外国語を学ぶ子どもたちにとって、習得した外国語を使ってその言語を話す外国の人たちとコミュニケーションを取ってみたい、と考えるのは、当然の欲求であり、またそれは非常にシンプルな思考であるといえるだろう。大学生や大人の外国語学習者の場合、仕事で役立てたい、原書で文学作品を読みたい、文化・芸術をより深く理解したい、あるいは現地に旅行する際の手助けとしたいなどといった理由が彼らの外国語学習の動機づけになっていることが多いが、高校生以下の外国語学習者の多くは、学習の初期段階において、その言語が使われている国の人たちとコミュニケーションを取れるようになりたいと考えて外国語を学び始めているはずである。では実際に、外国語を学ぶ子どもたちは、その当初の「想い」を実現できているのであろうか。本報告では、東京都内で教科としてロシア語が提供されている高等学校 3 校でロシア語を学んでいる子どもたちを例に、現段階で高校生ロシア語学習者に提供されている、ロシア人、とくに同年代のロシア人の青少年と実際にコミュニケーションを取ることのできる機会についてまとめ、今後の取り組みの展望について考察したい。

1. 高校生ロシア語学習者の「想い」と外国語を学ぶ高校生をめぐる状況

1.1 高校生ロシア語学習者の「想い」

本報告では、全国でもまれな存在である高校生ロシア語学習者のうち、東京都内で第一外国語および第二外国語としてロシア語が提供されている高等学校、具体的には都立北園高等学校(板橋区板橋)、関東国際高等学校(渋谷区本町)および早稲田大学高等学院(練馬区上石神井)の 3 校でロシア語を学んでいる子どもたちに、同年代のロシア人とコミュニケーションを取るためのどのような機会が提供され

ているのかについてまとめる。関東地方でロシア語を教科として学ぶことのできる高等学校は、上記 3 校に加えて慶應義塾志木高等学校(埼玉県志木市)と早稲田大学本庄高等学院(埼玉県本庄市)および立教新座高等学校(埼玉県新座市)があるが、都立北園高等学校、関東国際高等学校、早稲田大学高等学院のみを扱うことにしたのは、筆者が実際にこの 3 校で教鞭をとっており、日頃から生徒たちの声を聞いているということ、また筆者が持つ、ロシア人青少年とコミュニケーションを取ることである機会に関する情報を、ダイレクトに提供できているという理由からである¹。

本報告で取り上げるそれぞれの高等学校の簡単なプロフィール、ロシア語を学んでいる生徒たちの内訳と彼らがロシア語を学ぶ環境は、以下に挙げる通りである。

1.1.1 東京都立北園高等学校(東京都板橋区板橋)

昭和 3 年(1928 年)に東京府立第九中学校として開校。86 年の伝統を持つ、部活動や行事が盛んな進学校である。毎年、国公立大学や難関私立大学に進学する生徒たちがいる。国際理解教育に力を入れており、オーストラリア海外語学研修の機会が設けられているとともに、国際ロータリーの青少年交換プログラムを通して交換留学を実施している。

都立の高等学校で唯一、第二外国語でロシア語(昭和 39 年開講)を学ぶことができるほか、ドイツ語、フランス語(ともに昭和 22 年開講)および中国語(昭和 23 年開講)が開講されている。第二外国語の担当教員はいずれも非常勤講師で、平成 25 年度はドイツ語講師 5 名、フランス語講師 3 名、中国語講師 2 名、ロシア語講師 1 名である。

第二外国語の授業は、希望する生徒は誰でも、開講されている 4 言語の中から 1 言語を 2 年間継続で学習できるというシステムである。第三学年では、希望すれば、それまで 2 年間学習してきた言語を継続して学ぶことも可能である。授業は週に 1 度、第一学年および第二学年は 7、8 時間目に、第三学年は 5、6 時間目に 2 コマ連続(1 コマは 50 分)で開講されている。第二外国語科目の定期試験は年に 3 回行われ、正規の授業として単位が認定される。

¹ 平成 22 年 4 月より都立北園高等学校勤務。すべてのロシア語の授業を担当(週 4 コマ)。加えて平成 24 年 4 月より関東国際高等学校、早稲田大学高等学院勤務。関東国際高等学校では、すべての学年の日本人教員によるロシア語の授業を担当(週 7 コマ)。早稲田大学高等学院では、第三学年の言語系選択科目および文系選択科目のロシア語の授業を担当(週 4 コマ)。

ロシア語を選択している生徒の内訳は、平成 25 年度は第一学年 17 名(男子 2 名、女子 15 名)、第二学年 9 名(男子 5 名、女子 4 名)である。

1.1.2 関東国際高等学校(東京都渋谷区本町)

大正 13 年(1924 年)に関東高等女学校として開校。現在は普通科、外国語科、演劇科からなる男女共学の私立高等学校である。早くから外国語教育に力を入れており、外国語科に在籍する生徒の中には、帰国生やネイティブ、それに生活環境の中に外国語が身近にある子どもたちの割合が高い。

外国語科には英語を軸とする 4 コースと、中国語コース(昭和 61 年設置)、ロシア語コース(平成 3 年設置)、韓国語コース(平成 12 年設置)、タイ語コース、インドネシア語コース、ベトナム語コース(ともに平成 19 年設置)が設けられている。平成 25 年度は、中国語コースおよび韓国語コースは専任教員と非常勤講師が担当、ロシア語コース、タイ語コース、インドネシア語コース、ベトナム語コースはそれぞれ日本人の非常勤講師 1 名とネイティブの非常勤講師 1 名の 2 名体制で担当している。

外国語科ロシア語コースには、毎年 10 名前後が入学してくる。卒業までの 3 年間ロシア語コースに在籍し、平成 25 年度現在、第一学年は週に 5 コマ(1 コマは 45 分)、第二学年は週に 6 コマ、第三学年は週に 3 コマのロシア語の授業が必修である。さらに第三学年進級時に選択希望を出した生徒については、これに加えてさらに週 6 コマ、高度なロシア語を学ぶことのできる機会が提供される。すべてのロシア語の授業は、日本人とネイティブの教員が連携して行っている。定期試験は年に 4 回(第三学年のみ 3 回)行われる。

ロシア語コースに在籍している生徒は、平成 25 年度は第一学年 10 名(男子 4 名、女子 6 名)、第二学年 10 名(男子 6 名、女子 4 名)、第三学年 8 名(男子 5 名、女子 3 名。うち女子 1 名が週 6 コマの選択希望授業を履修している)である。

1.1.3 早稲田大学高等学院(東京都練馬区上石神井)

大正 9 年(1920 年)に旧制早稲田大学早稲田高等学院として開校。現在は中学部と高等学院からなる男子校の私立高等学校である。卒業生のほぼ全員が、早稲田大学の各学部に進学する。独自の教育課程を編成しており、生徒たちは高等学院在学中から、専門性の高い、発展的な授業を受けている。土曜日は午前授業

である。

第二外国語は、高等学院において選択必修科目として設置されており、第一学年から第三学年まで、継続で学ぶ必要がある。ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語(いずれも旧制高等学院当時からの伝統である)が開講されており、入学試験合格後、第二外国語科目の第一希望から第三希望までを提出することになっている。高大一貫教育が行われていることを背景として、早稲田大学進学後は、学部によっては高等学院で履修した第二外国語は、入学当初から中級クラスを履修することができるという環境がある。高等学院での第二外国語の授業は、日本人とネイティブの教員が担当しており、平成 25 年度は、ドイツ語、フランス語および中国語は専任教員および非常勤講師あわせて 6 名、ロシア語は非常勤講師 4 名である。

ロシア語を履修する生徒は、毎年およそ 20 名前後である。学年によっては、第二外国語科目の選択希望でロシア語を第一希望で提出した生徒と、第一希望の言語、あるいは第二希望までの言語にもれてロシア語選択になった生徒とが混在している場合もある。第二外国語科目は、平成 25 年度は、第一学年は全員共通で 3 コマ(1 コマは 50 分)、第二学年は全員共通で 2 コマ、文系選択でこれに加えて 2 コマ、第三学年は全員共通で 3 コマ、言語系選択科目としてこれに加えて 2 コマ、自由選択科目としてこれに加えてネイティブの授業を 2 コマ、文系選択科目でこれに加えて 2 コマを履修することができる。定期試験は年に 3 回(第三学年のみ 2 回)行われる。また、第二学年と第三学年でのみ実施される、その成績により希望する学部に進学できるかどうかを決めるための判断材料になる「特別考査」でも第二外国語科目の試験が実施され、文系学部を視野に入れている生徒は全員これを受験しなければならない。

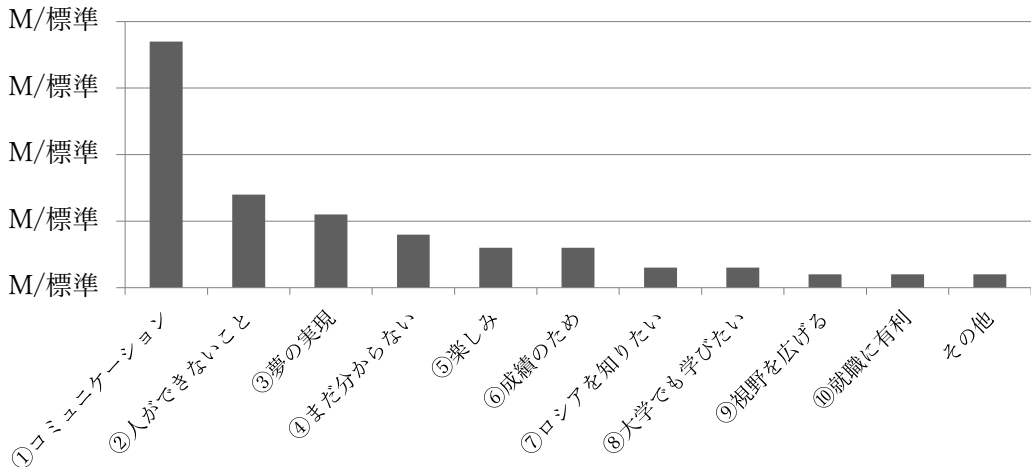
ロシア語の授業を受けている生徒は、平成 25 年度は第一学年 22 名、第二学年 16 名、第三学年 16 名(いずれも全員男子)である。

以上 3 校でロシア語を学ぶ生徒たちは、実際にどのような「想い」を抱いてロシア語を学んでいるのであろうか。これに関しては、平成 24 年 6 月から 7 月にかけて同じ 3 校で実施されたアンケート調査²の回答を参考にしたい。このアンケート調査では、「あなたがロシア語を学ぶ目的は何ですか」という質問項目を設けて、94 名の生徒た

² アンケート調査の方法に関しては、文末の付録①に詳しく記した。このときの調査結果については、福田知代(2013)「大学以外の教育機関におけるロシア語教育—高校生と社会人の学習意識を中心として—」『外国語教育論集』第 35 号(91-110). を参照されたい。

ちに自由に回答してもらった。複数の理由で回答した生徒たちも多かったことから、回答の総数は生徒たちの合計人数よりも多くなっている。生徒たちの回答とその人数をまとめると、図 1 のようになる。

図 1 生徒たちの回答と人数

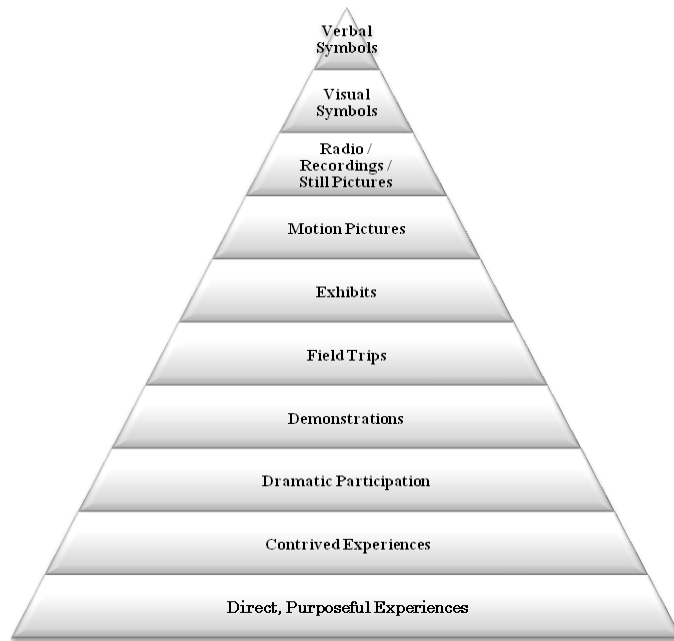


最も多く、37名の生徒が挙げた目的が、①「身に付けて世界の人たちとコミュニケーションをとること」であった。現在、積極的に海外に出て行く若者が激減していると危機感が唱えられているが、高等学校という若い段階からさまざまな外国語や外国文化に触れている生徒たちは、外国と聞いても臆することなく、機会があれば世界の人と関わりたいと考えている。裏を返せば、外国語を学んでいるのなら、その国の人とコミュニケーションを取るのは至極当然のことであると彼らは認識しているのである。

一方、視聴覚教育法の観点から言えば、今からおよそ70年前にエドガー・デールが提唱した有名な「経験の円錐³」が示しているとおり、ある経験が個々の経験者の中で概念化するためには、図2のとおり、誰かから話を聞くだけの経験よりも、自らが直接的で具体的な経験をする方が有効であることが広く知られている。これを教育現場に応用して考えれば、教育者が現実に近い環境を学習者に提供すればするほど、そこでの学習が、大いなるインパクトを伴って学習者の中に刻みこまれることになるのである。

図 2 経験の円錐

³ Edgar Dale, *Audio-Visual method in teaching* (New York: Dryden Press, c1946), p. 39.



限りある時間内で、生徒たちにより有効な学習をしてもらいたいと考えてこの教育法を重んじている筆者の個人的な教育観として、教室の中だけでロシアやロシア語について学ぶのでは、実際のほんの一握りしか知ることにはできないだろうとの思いから、積極的に教室の外に連れ出し、教室外で実際にロシア語を使ったり、ロシアの文化を肌で感じたりなどのさまざまな実体験をしてもらうことにしている⁴。そのような実体験をする場を各校で年間数回ずつ提供することにしているが、毎回新しい体験をした生徒たちは、その後また目標を新たにし、強い意欲を持ってロシア語学習に取り組むことができるようになっていく。つまり、時折このような実体験をする機会を提供することは、学習効率が高くなることに加え、学習意欲の維持・向上に大いに寄与していることから、これらを積極的に取り入れていくことは非常に有効であるといえるだろう。さらに、高校生ロシア語学習者の多くが「世界の人たちとコミュニケーションを取りたい」という「想い」を抱いて日々ロシア語を学んでいることが明らかとなっている以上、その「想い」を無視するなどということは到底できない。

⁴ 福田知代 (2014) 「実体験を通じたロシア語教育—高校生ロシア語学習者を対象とした取り組みの一例—」『外国語教育論集』第 36 号 (83-92) を参照されたい。

では実際に、東京都内でロシア語を学ぶ高校生には、どのような実体験の場が提供されているのであろうか。本報告では、多くの生徒たちがロシア語学習の目的として挙げた「身に付けて世界の人たちとコミュニケーションをとること」のうち、同年代のロシア人青少年とコミュニケーションを取ることのできる機会に特に焦点を当てて考察していきたい。

1.2 高校生外国語学習者を取り巻く現実

本節では、高等学校で外国語を学ぶ生徒たちに現在提供されている、その言語が使用されている国の同年代の青少年とコミュニケーションを取ることのできる機会は、実際にはどの程度存在しているのかについて見てゆく。先ほどからコミュニケーションを取る相手を「同年代の青少年」と限定している理由は、たとえばロシア語に関して言えば、関東国際高等学校ではロシア語コースの全員が、そして早稲田大学高等学院では第三学年でネイティブのロシア語の授業を選択すれば、「経験の円錐」で言うと円錐の下から二段目にあたる *Contrived Experiences* に相当する、「ロシア人」とコミュニケーションを取る機会は保障されているものの、やはり生徒の心理的面からも、「教師—生徒」としてのコミュニケーションの枠を出ることはなかなか困難であろうと考えられるからである。もし円錐の一段目である *Direct Purposeful Experiences* を生徒たちに経験させるためには、たとえばコミュニケーションの相手が、興味・関心が一致する同年代のロシア人であればベストであろうと考えられる。そしてもしコミュニケーションの相手が同年代の青少年であれば、ここに「より近づきたい」「この先長く友情をほぐくみたい」という心情がさらに付加されるはずで、それによりさらに具体的なコミュニケーションを取りたいという意欲が生まれ、結果的に非常に高い学習効果が生まれると期待できる。近年 SNS が普及してきているが、多くの生徒たちにとって、そのようなツールを使って積極的に連絡を取り続け合いたい相手としては、教師や大人の「お知り合い」よりも、やはり同年代の「友人」の方が勝るだろう。

現在、高等学校で外国語を学ぶ生徒たちに、さまざまな機関が、同年代の子どもたちとコミュニケーションを取ることのできるさまざまな機会を提供している。たとえば英語に関して言えば、全国の多くの高等学校において、希望者を対象とした海外語学研修が学校行事の一環として実施されており、多くの場合において、現地では同年代の青少年と交流する機会が準備されている。本報告で取り上げている高等学校3校とも、英語圏への海外語学研修を毎年実施している。また高等学校の中には、

英語圏の国が修学旅行の行き先に選定されている場合もある。さらに英語を軸とした国際的な青少年交換プログラムとして、国際ロータリーの青少年交換プログラムが存在している。高等学校によってはこのプログラムを通じて交換留学生の派遣・受入を行っており、英語の能力試験を含む選考試験に合格すれば、このプログラムを通じてアメリカ合衆国・カナダ・メキシコ・ブラジル・タイ・トルコ・ドイツ・フランス・スロヴァキアなどといった国々の現地校に1年間通うことが可能である。文部科学省初等中等教育局国際教育課が隔年で実施している「高等学校等における国際交流等の状況について」の平成23年度の調査結果によれば、全国でおよそ2万6000名の高校生が短期留学または語学研修で、またおよそ8万1000名の高校生が修学旅行でアメリカ、オーストラリア、カナダなどの英語圏を訪れている。一方、全国でのべおよそ870校の高等学校が、英語圏からの留学生、語学研修生、訪問団を受け入れており、たとえ英語圏への修学旅行や語学研修に参加できる環境がなくとも、日本国内にいながらにして、学校内で同年代の青少年とコミュニケーションを取ることは可能である。このように、英語に関しては、学校単位あるいは組織単位で、同年代の青少年とコミュニケーションを取る機会が比較的多く提供されている。

一方、英語以外の外国語に関して言えば、言語によってあるいは高等学校によって事情はまちまちである。たとえばフランス語に関しては、全国的な組織である日仏高等学校ネットワーク「コリブリ」が存在する。これは全国でフランス語の授業が実施されている高等学校とフランス大使館が展開しているもので、フランス語の授業が実施されている高等学校およそ220校のうち、都立北園高等学校および早稲田大学高等学院を含む41校がこの「コリブリ」に加盟しており、平成17年(2005年)にコリブリ憲章が策定されて以降、フランス側の加盟校と連携して、相手国との交換留学が実施されている。毎年40名近くの日本の高校生が「コリブリ」を通じてフランスの現地校に短期留学している一方、同程度の人数のフランスの高校生が日本の高等学校に短期留学している。また、これとは別に、学校単位でフランス語圏の現地校と提携している高等学校もおよそ20校存在する。文部科学省の調査結果によれば、全国でおよそ620名の高校生が短期留学または語学研修で、またおよそ5400名の高校生が修学旅行でフランス語圏を訪れている。一方、全国でのべおよそ40校の高等学校が、フランス語圏からの留学生、語学研修生、訪問団を受け入れている。

次にドイツ語に関しては、全国でドイツ語の授業が提供されている高等学校およそ100校のうち、都立北園高等学校および早稲田大学高等学院を含む4校がPASCHプロジェクトのパートナー校に指定されており、ゲーテ・インスティトゥートのサ

ポートを受けてドイツとの国際交流を深めている。そして条件を満たせば、奨学金を利用してドイツ国内語学研修に参加することができるが、この研修の目的は世界でドイツ語を学んでいる高校生が一堂に会し、共通言語であるドイツ語で交流を行うというものであるため、必ずしも現地の子どもたちとの交流が行われるわけではない。この PASCH プロジェクトは平成 20 年(2008 年)からドイツ連邦共和国外務省の主導で展開されているもので、世界各国に設置されているドイツ文化センター内に設置されているゲーテ・インスティトゥートがさまざまな支援・協力を行っており、たとえ PASCH プロジェクトのパートナー校に通っていないくても、さまざまなイベントに参加することが可能である。また、学校単位でドイツ語圏の現地校と提携している高等学校もおよそ 40 校存在する。文部科学省の調査結果によれば、全国でおよそ 600 名の高校生が短期留学または語学研修で、またおよそ 1300 名の高校生が修学旅行でドイツ語圏を訪れている。一方、全国でのべおよそ 50 校の高等学校が、ドイツ語圏からの留学生、語学研修生、訪問団を受け入れている。

また中国語に関しては、関東国際高等学校および早稲田大学高等学院を含めて、学校単位で希望者を募って現地研修を行っている高等学校が数多く存在する。さらに 1980 年代後半から、中国を修学旅行先として選定している高等学校も全国で一定数存在しており、現地の青少年とコミュニケーションを取ることのできる機会はある程度保障されていると言えるだろう。韓国語に関しても、関東国際高等学校で行われているように、学校単位で設けられている現地研修の機会を通じて同年代の子どもたちとコミュニケーションを取ることが可能であり、また修学旅行でも現地の高等学校を訪れている日本の高校生も多い。

では、ロシア語に関してはどうだろうか。ロシア語に関して言えば、フランス語のような全国的なネットワークは現在のところ存在しておらず、ドイツ語のように相手国のサポートを受けて国際交流の機会を得るという道も現在のところ存在していない。また、修学旅行先をロシアに選定している高等学校は、文部科学省の調査では公立校 1 校のみであり、参加者は 20 名とのことである。さらに高校生の身分のままロシアへ長期留学している子どもたちも若干名いるが、いずれも個人での留学であり、ロシアの現地校と提携している高等学校は全国でわずかに 5 校である。このことから分かるように、ロシア語をめぐるのは、日本の高等学校でロシア語を学ぶ生徒に提供されている、同年代のロシア人の青少年とコミュニケーションを取る機会は、非常に限られていると言える。また、対象は高校生ではないが、平成 25 年秋に告示された、日露青年交流事業の一環で行われる「モスクワ大学への日本人学生 100 名派遣プログラム」

募集の際には、一般応募 50 名の定員に対し、およそ 800 名にも上る大学生が応募してきたとの情報からも分かる通り、このような一つの募集に対して大勢の希望者が殺到する背景には、若い世代のロシアを訪れたい、ロシアの同年代の学生と交流したいとの「想い」はますます強くなるのに対し、それを実現してくれるような機会がまだまだあまりにも少ないのだということを具体的に示した事例であると言えるだろう。

しかしながら、このような状況でも、平成 23 年 4 月から平成 25 年 12 月までの間に、都立北園高等学校、関東国際高等学校および早稲田大学高等学院でロシア語を学んだ、あるいは現在学んでいる生徒のうちの多くが、高等学校や公的機関の援助を受けて、同年代のロシア人の子どもたちと実際にコミュニケーションを取ることができた。次の 2. では、それらの機会について個別にまとめ、同年代のロシア人青少年とコミュニケーションを取ったという経験が、実際に生徒たちの心情・学習意欲にどのような影響を及ぼしたかについても考察していく。

2. 都内の高校生ロシア語学習者に提供されている同年代のロシア人と関わる機会

2.1 関東国際高等学校における「ロシア短期留学」と「世界教室」

本節では、全国でロシア語を教科として学ぶことのできる高等学校で唯一実施されている、関東国際高等学校の「ロシア短期留学」と、「世界教室」の取り組みを通じて、ロシア語を学んでいる子どもたちが同年代のロシア人の青少年とコミュニケーションを取っている例を挙げる。

1.1.2 でも紹介したとおり、関東国際高等学校では、平成 3 年 4 月にロシア語コースが設置された。設置の初年度から「ソ連への旅」と題された研修旅行を学校単位で行っており、平成 4 年からは「ロシア短期留学」という名称で継続されている。かつては春や夏などに 1 ヶ月から 2 ヶ月間実施されていたが、現在では隔年で 3 月半ばから 4 月半ばまでの 1 ヶ月間、第一学年および第二学年合同での実施が定着している。隔年での実施であるため、ロシア語コースに所属している生徒たちは、入学年度によって第一学年の終わりまたは第二学年の終わりに研修旅行に参加する。研修旅行への参加代金は、すべて自己負担である。このロシア短期留学への参加は希望制であり、前年度の 11 月頃に学校からの説明会が行われ、その後参加するかどうかの意思表示をしなければならない。参加が決定した生徒は、出発までの間に、この短期留学を最大限に有益なものとするため、一連の周到な事前研修を経験する。具

体的には、社会科の教員によるロシアの地理・歴史などに関する連続講義を受けたり、各自で調べ学習をしたり、ホームステイ先となる家族に向けた自己紹介の文をあらかじめ準備したり、現地で予定されているロシア人青少年との交流会の準備を行うというものである。

前回の「ロシア短期留学」は、平成 24 年 3 月から 4 月にかけて行われ、新第二学年 8 名のうち 6 名、新第三学年 11 名のうち 7 名の計 13 名が参加した。現地でのプログラムは、2 つのブロックに分かれている。一つ目のブロックは、語学を学ぶ期間である。はじめの一週間と最後の一週間弱でウラジオストクにある極東連邦大学付属のロシア語学校の授業をロシア語で受け、その期間の平日は大学の寮で生活し、週末には極東連邦大学付属高等学校に通う生徒の家でホームステイを行うというものである。現地の施設、劇場や博物館、サーカスなどを訪れる機会も設けられる。また、現地の生徒との交流会が行われるのもこの期間である。二つ目のブロックは、国内小旅行を行う期間である。行き先は実施回によって違いはあるが、前回の短期留学では全日程のうちのちょうど真ん中の時期に、サンクト・ペテルブルグへの旅行を行った。この小旅行の期間のみ、ホテルに宿泊する。極東連邦大学付属のロシア語学校での語学研修を終え、修了試験に合格すると、参加した生徒たちに修了証明書が交付され、大学受験などで公的な資格としてこれを利用することが可能となる。

一方、「世界教室」は、平成 9 年に関東国際学園の当時の理事長により、国際交流の機会を提供することによって、世界中の青少年や教員が共有できる真に国を超えた教育の組織を作ることを目的として設立されたものである。設立初年度の平成 9 年は、当時の文部省や各国大使館の後援や協賛を受けて関東国際高等学校で国際フォーラムが開催され、その後毎年メンバー校の中から決定された開催校において 10 月下旬から 11 月上旬にかけて継続して実施されてきた。平成 25 年度は関東国際高等学校が国際フォーラム 2013 の開催校となり、10 月 21 日から 11 月 2 日までの約 2 週間の日程でさまざまなプログラムが行われた。世界各国の 21 のメンバー校から国および地域の代表として参加した 3 名の学生と 1 名の代表教員らは、勝浦キャンパス(千葉県勝浦市)でのセミナーに参加したのち、都内近郊を観光して回った。その後、プログラムの中盤に開催された関東国際高等学校の学園祭では「世界教室」の展示を行い、その前後の期間は関東国際高等学校に通う生徒たちの家庭でホームステイを行った。プログラムの後半はまた勝浦キャンパスに場所を戻し、大学生との交流、スポーツイベント、ディベートなどを連日行った。

この「世界教室」のプロジェクトには関東国際高等学校からはおよそ 40 名が参

加しており、うちロシア語コースからは1名が参加している。この生徒は、国際フォーラムが開催されている期間中、ロシアのメンバー校である極東連邦大学附属高等学校から参加した生徒らとともに行動し、ホームステイも受け入れて濃密な時間を過ごした。また終日ホストファミリーの裁量で過ごす日程では、一日を使って都内を案内し、名所や建築物を紹介したり、一緒に食事を取ったりなどして交流を深め、ロシア語を使って積極的にコミュニケーションを取った。

また同じ「世界教室」の枠組みで、隔年で3月に極東連邦大学附属高等学校の生徒らが来日している。今回は平成25年3月9日から20日までの約2週間の日程で高校生8名が来日し、さまざまなプログラムが行われた。具体的には勝浦キャンパスでのセミナーに参加したのち、関東国際高等学校の授業や交流会に参加したり、都内近郊を観光して回ったりなどした。勝浦キャンパス以外の日程では、ホームステイを8日間行った。関東国際高等学校の授業や交流会の日程では、ロシア語を学んでいる第一学年から第三学年までの11名が参加し、極東連邦大学附属高等学校の生徒たちとともに日本史の特別授業を受けたのち、それぞれの自己紹介と簡単なゲームをいくつか行った。また日を改めて実施された都内近郊を観光して回る日程では、卒業後にロシアに渡ることが決定していた第三学年の生徒が同行し、名所や建築物を紹介したり、一緒に食事を取ったりなどして交流を深め、ロシア語を使って積極的にコミュニケーションを取った。「世界教室」に参加しているロシア語コースの生徒1名は、このときにホームステイを受け入れていた友人と一緒に、来日していたロシア人を連れて都内観光をし、「世界教室」が主催した交流会にも参加して積極的にロシア語を使ってコミュニケーションを取った。

2.2 日露青年交流センターが実施する「日本語履修高校生招聘プログラム」

前節では、学校単位で行われているロシア短期留学について取り上げたが、本節および次節では、公的機関が行っている招聘プログラム、受入・訪問事業を通じて、東京都内でロシア語を学んでいる生徒たちが同年代のロシア人と出会い、実際にコミュニケーションを取った例を取り上げていく。

まず、本節では平成23年から毎年行われている、日露青年交流センターが実施するプログラムを通じて、ロシア語を学んでいる生徒たちが、同年代のロシア人青少年と交流した例を取り上げる。日露青年交流センターは、平成10年に行われた日露首脳会談において日露間の国民レベルでの人的交流を抜本的に拡充することが

合意されたのを受け、翌平成 11 年に両国の政府間協定に基づいて設置された日露青年交流委員会の事務局として設立された公的機関である。その後平成 20 年には、日露青年交流の規模を一層拡大し、日露合わせて毎年 500 名規模の交流を実施することが両国首脳間で合意された。そして平成 24 年にこの目標が達成されたことを踏まえて、平成 25 年の日露首脳会談において、青年交流が日露関係の着実な発展のために特別な意味を持つことが確認され、両国間の青年交流をさらに拡大していくことになった。

このような流れの中、平成 23 年から、想定されている「青年」としての年齢のうちでもっとも若い層である高校生を対象にした「日本語履修高校生招聘プログラム」が開始された。これは、ロシア全土の教育機関で日本語を学んでいる高校生を、ロシアの秋休みである 11 月上旬に日本に招き、一週間の日本滞在中に、文化体験および日本でロシア語を学んでいる同年代の高校生との交流を行うことが主たる目的に掲げられたプログラムである。プログラムの初年度である平成 23 年にはロシア全土から 14 名が来日し、翌平成 24 年には 19 名が、平成 25 年には 37 名が来日した。

このプログラムでは、日本でロシア語を学んでいる高校生と、来日したロシアの高校生たちが交流する機会が、都内散策および学校体験の 2 つ設けられている。都内散策に関しては、これは来日したロシアの高校生たちと日本でロシア語を学んでいる高校生たちがグループに分かれ、お台場や秋葉原、原宿や新宿御苑などの決められたコースを一日かけて回るという日程で行われるものである。プログラムの初年度は、日本側からは大学生が参加したが、翌平成 24 年は関東国際高等学校および早稲田大学高等学院でロシア語を学んでいる生徒たちが、平成 25 年はこれに加えて都立北園高等学校でロシア語を学んでいる生徒たちが、都内散策の「お相手」に応募し、のべ 46 名がこの日程でロシアの高校生たちと交流した。また平成 25 年に限っては、都内散策の日程終了後に懇親会が開催され、都内散策の日程には参加することができなかった 3 校の生徒たち 20 名もこの懇親会の場でロシアの高校生たちと楽しく交流することができた。

東京での学校体験に関しては、プログラムが開始されてから毎年、都立北園高等学校がその受入校となっている。ロシアの高校生たちは、昼時に来校して食堂で日本の生徒たちと同じメニューの昼食をとったのち、校内見学、授業体験と、ロシア語を学んでいる生徒たちを中心に準備された放課後のセレモニー・交流会に参加する。授業体験は、具体的には三味線、体育館での体育(女子)、武道場またはグラウンドでの体育(男子)の三種類で、通常の授業の中にロシアからの高校生たちが混じ

り、さらにこれに加えてロシア語を履修している生徒たちも「取り出し」で参加することもある。この一日のプログラムの中で、都立北園高等学校の生徒たちは、ロシア語を履修しているかどうかには関わらず、廊下や教室内、食堂、交流会の場など、さまざまな場面でロシアの高校生たちを見かけると、話かけたり、日本語を教えてあげたり、またロシア語の言葉を教わったりなど、積極的にコミュニケーションを取っている。特に、ロシア語を履修している生徒たちは、放課後に予定されるセレモニー・交流会を前々から準備し、この日が来るのを心待ちにしている。生徒たちが主役となる交流会では、通例、第一学年は各自の自己紹介とロシア語での合唱を数曲披露し、第二学年は学校紹介と日本の高校生の学校生活について、および日本の若者の間で流行していることについてロシア語でプレゼンテーションを行う。その後、両国の高校生たちは、一緒におしゃべりをしたり、誘い合って写真を撮ったり、プレゼントを交換したり、さらにその場で SNS を通じて「友だち」になったりなど、迎えるバスが出発する瞬間まで思い思いの方法で交流する。このうち、平成 25 年に実施されたプログラムでは、学校体験の日程より前に行われた都内散策およびその後の懇親会の日程で、都立北園高等学校でロシア語を学んでいる生徒の多くがすでにロシアの高校生と交流して打ち解けた関係になっていたため、再会を喜び、隣同士の席に仲良く座ってコミュニケーションを楽しんでいる様子も見られた。

プログラムが開始されてからこれまでの三年間で、都立北園高等学校でロシア語を学んでいる生徒のべ 61 名が、この学校体験の日程でロシアの高校生たちと交流した。

2.3 独立行政法人北方領土問題対策協会が実施する「北方四島青少年受入・訪問事業」

本節では、平成 25 年 5 月に独立行政法人北方領土問題対策協会が実施した北方四島青少年受入事業および同年 8 月に実施された北方四島交流教育関係者・青少年合同訪問事業を通じて、都立北園高等学校の生徒たちが日本の北方四島に住むロシア人の青少年とコミュニケーションを取った例について取り上げる。北方四島交流事業は、平成 3 年に日本と当時のソビエト連邦の両国の外相間で、「領土問題の解決を含む日ソ間の平和条約締結問題が解決されるまでの間、相互理解の増進を図り、もってそのような問題の解決に寄与する」ことを目的として、日本国民と北方四島在住ソ連人との間で、政府が発行する身分証明書によって相互渡航を行

うことなどの枠組みが作られたことに始まるものである。翌平成4年から実際に北方四島との相互交流が開始され、これまででのべおよそ1万1440名がこの枠組みで北方四島を訪れ、反対にのべおよそ8300名の四島在住のロシア人が全国各地を訪れた。また、青少年に限って見れば、高校生以下の年齢でこれまでに北方四島を訪れた子どもたちはのべおよそ1000名、反対に受入事業を通じて全国各地を訪れた四島在住の青少年はのべおよそ1660名である。

このようにして平成4年から大規模に実施されている北方四島青少年受入・訪問事業に、平成25年に2回、都立北園高等学校でロシア語を学んでいる生徒たちが参加することができた。1度目は、5月末に実施された北方四島青少年受入事業において、四島在住の青少年45名が都立北園高等学校を訪れ、学校体験を行った際である。前節で取り上げた、日露青年交流センターが実施する「日本語履修高校生招聘プログラム」を通じてロシアで日本語を学んでいる高校生たちが来校した際と同様、四島在住のロシア人の青少年は、昼時に来校し、校内見学、授業体験と、ロシア語を学んでいる生徒たちを中心に準備された放課後のセレモニー・交流会に参加した。授業体験は、具体的には三味線、バトミントン、柔道の三種類で、通常の授業に四島からの青少年が参加した。都立北園高等学校の生徒たちは、たびたびロシア人のグループが学校にやって来るので比較的このような光景に慣れているため、この一日のプログラムの中で、ロシア語を履修しているかどうかには関わらず、廊下や教室内、交流会の場など、さまざまな場面でロシア人の青少年と積極的にコミュニケーションを取っていた。特に、ロシア語を履修している生徒たちは、放課後に実施された交流会において、第一学年は各自の自己紹介とロシア語で「カチューシャ」の合唱を披露し、第二学年は学校紹介と日本の高校生の学校生活について、および日本の若者の間で流行していることについてロシア語でプレゼンテーションを行った。その後、双方の高校生たちは、一緒におしゃべりをしたり、誘い合って写真を撮ったりなど、迎えるバスが出発する瞬間まで思い思いの方法で交流した。また日を改めて行われた同じ四島在住の青少年たちとの夕食交流会にも、都立北園高等学校でロシア語を学んでいる生徒たちが招待され、この北方四島青少年受入事業の日程を通じて、学校受入の際には27名、後日行われた夕食交流会ではそのうちの11名がロシア人の青少年と再び交流した。

平成25年に都立北園高等学校でロシア語を学んでいる生徒たちが参加することができたもう一つの事業は、8月上旬に行われた北方四島交流教育関係者・青少年合同訪問事業である。この事業では全国の教育関係者および青少年合わせて63

名が2日間の日程で色丹島を訪問した。青少年の内訳は、全国から参加した12名の高校生・中学生および都立北園高等学校でロシア語を学んでいる生徒5名であった。参加者はみな、根室で所定の事前研修を受けたのち、船舶「えとびりか」で色丹島に向かった。都立北園高等学校からの参加者は全員、5月末の学校受入の際に四島の青少年たちと交流しており、特に色丹島からの参加者たちとは現地で2カ月弱ぶりの再会を果たした。全国から参加した高校生・中学生と四島在住のロシア人青少年がコミュニケーションを取ることでできる日程のみに関して挙げれば、初日に行われた穴澗初等中等学校での交流会とスポーツ交流・意見交換会および2日目に行われたホームビジットおよび夕食交流会があった。訪問の初日に穴澗初等中等学校の講堂で行われた交流会では、青少年の代表団からは、青森県から参加した高校生が大湊ねぶたの踊りと笛の演奏を披露し、都立北園高等学校から参加した生徒がロシア語で「カチューシャ」の合唱を披露した。また大阪から参加した中学生と、色丹島で音楽学院に通う子どもがピアノの演奏を披露し、その後、島の女の子たちが日本語講師に習った日本語の歌を数曲披露した。それから訪問団のうち、青少年のみが体育館に移動し、色丹島に住むロシア人の青少年らとスポーツ交流を行った。スポーツ交流の具体的な内容は、バレーボールと、双方の子どもたちが一緒になって自主的に始めたバスケットボールを使ったゲーム、それにロシアの伝統的なボール遊びの「ピオネール・ボール」である。双方の青少年は、自分たちで混合チームを作って、歓声を上げながら一緒に汗を流した。その後、訪問団の青少年と色丹島に住むロシア人の青少年が大きな一つの輪になって座り、意見交換会が始まった。それぞれがテーマを出し合い、スポーツや趣味、将来の夢などについて語り合った。訪問2日目に行われたホームビジットでは、全訪問団員が8つのグループに分かれ、色丹島の8家庭で昼食をとり、それぞれの家庭で午後のひとときを過ごした。ホームビジットを受け入れた家庭の多くに、訪問団の青少年と同じくらいの年齢の子どもたちがおり、持参したプレゼントを渡したり、一緒に日本の伝統的な遊びをしたり、ジェスチャーゲームなどをしていった。その後レストランで夕食交流会が行われ、現地の子どもたちも多く参加した。フォークダンス「カラヴァイ」や「ルチェヨーク」という子どもの遊びを双方の青少年が一緒になって楽しんだ。また、双方の青少年による日本語での合唱とロシア語での合唱が披露された。2日間の交流で、訪問団の青少年と現地の青少年はすっかり打ち解け、レストランを出てから船舶「えとびりか」に戻るまで、あちこちでお互いに長いこと写真を撮り合い、腕や肩を組んで歩いた。別れが近付いているのを感じ、なかなか足が前に進まないでいる様子も見られた。いよいよ船が島を離れようとする際

には、岸壁や船上で涙ぐんでいる子どもたちの姿も見られた。

2.4 同年代のロシア人青少年とコミュニケーションを取ったという経験が生徒たちの心情・学習意欲に及ぼす影響

以上のとおり、都立北園高等学校に関しては平成 23 年 4 月から平成 25 年 12 月末までの間で、のべ人数で都立北園高等学校の 123 名が、関東国際高等学校および早稲田大学高等学院に関しては平成 24 年 3 月から平成 25 年 12 月末までの間で、それぞれ 68 名、17 名、3 校合計で 208 名が、同年代のロシア人の青少年とコミュニケーションを取るという機会を経験した。

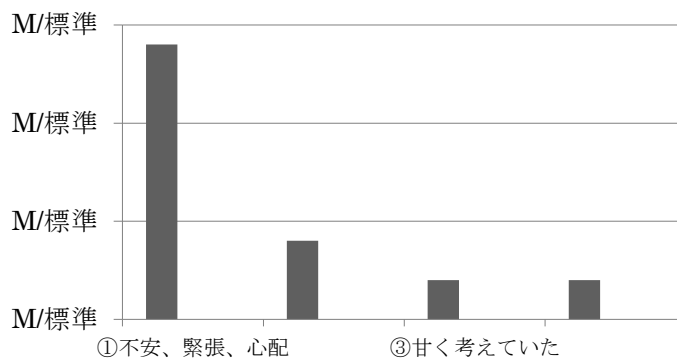
関東国際高等学校で「ロシア短期留学」に参加した生徒たちに、帰国後に話を聞いてみると、みな口ぐちに楽しかった思い出を語り始めた。ホームステイ中にホストファミリーとどのような生活をしたか、どのような「冒険」をしたか、どこを訪れて何を見てきたか、ロシア語を使ってどのような成功体験をしたか、出会った人たちの話、現地で行った同年代の友人たちと連絡先を交換してきたなどなど、生徒たちの話は尽きなかった。さらに子どもたちは実際に 2 都市に滞在したので、各都市の観光名所を訪れることができ、またヨーロッパ・ロシアと極東ロシアの違いについても体験的に理解することができていた。エドガー・デールの「経験の円錐」の、**Direct Purposeful Experiences** に相当する、現物を体感する機会を数多く持った子どもたちは、その後のロシア語の授業においても、教科書に出てくる街の名前や名所、歴史上の人物についてもすんなりと理解することができていた。また教室外でも、多くの生徒が、各機関が実施するロシア語能力をはかる検定試験を積極的に受検したり、ロシア語スピーチコンテストに出場したりなどして、自身のロシア語力をさらに確かなものにするために、具体的な行動を起こしていた。前回の「ロシア短期留学」を経験した生徒の中には、将来ロシア語を使った職業に就くことを明確な目標に掲げた生徒も何名かおり、筆者と放課後に通訳訓練をしたり、あるいは翻訳の添削を依頼してきたりなどして、より高度なロシア語技能を身につけようと努力していた。そのような生徒のうち的一名は、平成 25 年 3 月に卒業後、ロシアの大学入学を目指し、現在ウラジオストクで学んでいる。この生徒に、いつロシアの大学に入学することを決心したのかと聞くと、高等学校入学時から可能性の一つとして考えていたが、「ロシア短期留学」を経験して意志が固まった、と話してくれた。また、「世界教室」に参加した生徒は、極東連邦大学付属高等学校の生徒らと多くの時間ロシア語でコミュニケーションを取っていたため、ロシア語

の運用能力が飛躍的に向上し、またロシア人を相手にしても非常に落ち着いたやり取りができるようになっていた。さらに、ホームステイで受け入れていた生徒とは特に親密な関係を築くことができていたようであった。

このように、「ロシア短期留学」と「世界教室」に参加した生徒の大部分に、ロシア語運用能力そのものの向上に加え、ロシア語学習に対する意欲の向上も見られた。また、「ロシア短期留学」出発前、「世界教室」参加前までにはまだ習っていなかった単語やフレーズを聞いてきた影響からか、その後の授業に対する理解度も向上している様子が見られた。さらに、生徒によっては、そこでの経験が、一步前に踏み出して夢を実現するための後押しの役割を果たしていたことも明らかとなった。

一方、日露青年交流センターが実施する「日本語履修高校生招聘プログラム」および独立行政法人北方領土問題対策協会が実施する「北方四島青少年受入・訪問事業」を通じて、同年代のロシア人グループと交流する機会を多く経験している都立北園高等学校の生徒たちに対して、平成 25 年 9 月 3 日と 5 日に、第一学年 17 名、第二学年 9 名を対象にした『『実体験を通じたロシア語・ロシア語学習』アンケート⁵』を実施し、『『ロシア語を使う実体験』をしたことのある人に質問します。①『実体験』前、②『実体験』をしているとき、③『実体験』後のそれぞれの場面で、自分の中で何らかの気持ちの変化はありましたか』との質問に自由に回答してもらったところ、それぞれ以下のような結果が見られた。なお、複数の理由で回答した生徒、無回答であった生徒がいたことから、回答の総数は生徒たちの合計人数と一致していない。

図 3 「実体験」前



⁵ アンケート調査の方法に関しては、文末の付録②に詳しく記した。

図 4 「実体験」をしているとき

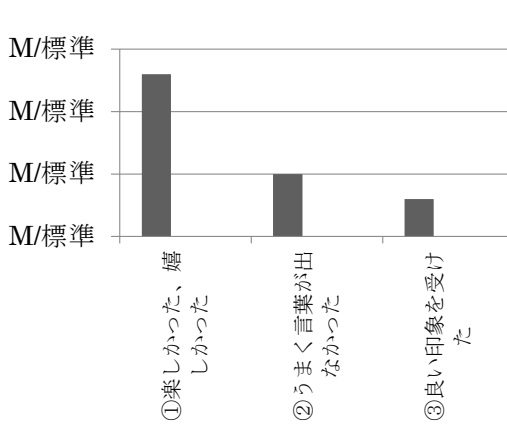


図 5 「実体験」後

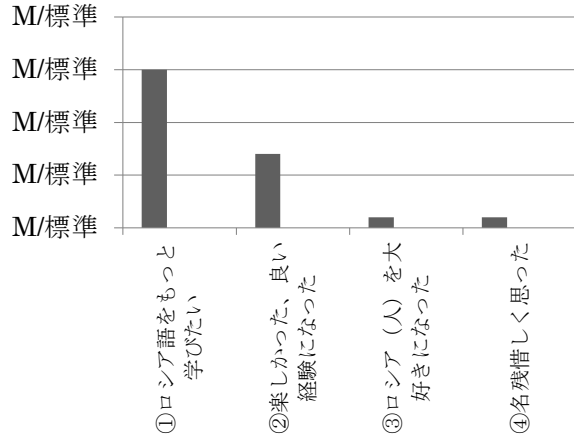


図 3 の『「実体験」前』の気持

ちとしてもっと多くの生徒が挙げたのが、「①不安だった、緊張していた、心配だった」というネガティブな回答であり、これが「②楽しみにしていた」という回答を上回っていることから、単純に楽しみにする気持ちよりも、実際にコミュニケーションをうまく取ることができるかという不安・心配を抱いていることが分かる。しかし図 4 の『「実体験」をしているとき』の結果を見てみると、「①楽しかった、嬉しかった」という気持ちに変化している様子が見て取れる。一方で「②うまく言葉が出なかった」と回答した生徒も一定数おり、言葉が通じずに歯がゆい思いをしていたことが分かる。そして図 5 の『「実体験」後』の回答を見てみると、「①ロシア語をもっと学びたいと思った」「②楽しかった、良い経験になった」「③ロシア(人)を大好きになった」「④名残惜しく思った」というように、すべての回答がポジティブなものになっている。特に、15名の生徒が「①ロシア語をもっと学びたいと思った」と回答しており、同年代のロシア人の青少年と交流しているときにその場を楽しんだ生徒も、言葉が通じずに悔しい思いをした生徒も、最終的にその感情を学習意欲の向上に向けておくことができていると判断できる。さらに言えば、この学習意識の高まりは、教師や周囲の人物によって「発破をかけられて」生じたものではなく、体験を通じて生徒たち自らの中に芽生えたものであるという点は、注目に値するだろう。また、「良い経験になった」と回答している生徒たちがいることから分かるように、15歳から18歳という多感な時期に、ロシア語を学び、学んだロシア語を使って同年代のロシア人の青少年とコミュニケーションを取るといった経験は、我々大人が想像するよりもはるかに強烈な印象を与えるだろうし、その後の生徒たちの人生に深く刻ま

れるものとなるであろう。

前述のとおり、筆者は、限りある時間内で生徒たちにより有効な学習をしてもらいたいとの考えから、現実に近い環境での体験が、大いなるインパクトを伴って学習者の中に刻みこまれることを願ってこのような機会を高校生ロシア語学習者に提供している。もっと言ってしまえば、ロシア語で同年代の青少年とコミュニケーションを取るということから生まれる、「突き刺さる体験」をしてもらうことを主たる大きな目的としているのであるが、それがもっともはっきりと表れた例として、日露青年交流センターが主催した「日本語履修高校生招聘プログラム」を通じて来日したロシア人と、東京都内でロシア語を学んでいる高校生が交流を深める中で、その友情がお互いにいつしか恋愛感情に発展したという出来事があった。ロシアで日本語を学んでいる高校生にとっては、このプログラムを通じて実際に日本を訪れるという「夢のような」日々を経験し、一方、ロシア語を学んでいる日本の高校生は、その言語が使われている国の人たち、特に同年代のロシア人とコミュニケーションを取りたいという「想い」がようやく実現したという、魔法にかかったような特別な時間を共有できたのであろう。そもそも、太古の時代から、言語の壁を乗り越えるもっとも大きなモチベーションとなってきたのは、交易や学問のツールとしたいという考えよりも、やはり心を通わせ合いたい、相手をもっと知りたい、自分をもっと知ってほしいという極めて人間的な考えであったはずである。実際、この生徒も、ロシア人の「恋人」に手紙を書いたり、SNSを通じてメッセージをやり取りしたりする中で、筆者に添削を依頼したり、ロシア語の表現の意味をたずねたりなど、自主的な学びを積極的に行っていた。また、早くロシアを訪れたい、「恋人」が日本の大学に入れるように手助けしたいなど、お互いの夢が実現するよう、協力していきたいとの考えも抱いていた。あとになって、筆者がロシア語を通じて同年代の青少年とコミュニケーションを取る機会を提供しているのは、「突き刺さる体験」をしてもらいたいからなのだと明かすと、この生徒は、「突き刺さりすぎて死にそう」と冗談めかして答えた。

おわりに

以上のように、「世界の人たちとコミュニケーションを取りたい」という、純粹で熱い「想い」を抱いて日々ロシア語を学んでいる高校生たちは、実際に同年代のロシア人の青少年とコミュニケーションを取ったり、またロシア人が暮らす土地を訪れてそこでしかできない経験をして見聞を広げたりすることにより、ただ単に「楽しい経験だった」と

いう一過性のものに終わらせることなく、もっと相手を知りたい、次に機会があったときには、相手の言語でもっとたくさんコミュニケーションを取りたいというように、学習意欲を高めることができていることが明らかとなった。さらに、そのような経験によって自分の将来像を明確にし、夢を抱き、次なる「想い」を自らの中に芽生えさせることにもつながっている。

しかしながら、前述のとおり、高等学校で教科としてロシア語が提供されている学校同士の全国的なネットワークは現在のところ確立しておらず、また相手国のサポートを受けて国際交流の機会を得るという道も現在ところ存在していない。若い世代のロシアを訪れたい、ロシアの同年代の青少年と交流したいとの「想い」はますます強くなるのに対し、それを実現してくれるような機会がまだあまりにも少ないのである。けれども、本報告で紹介したように、学校単位でロシアを訪れたり、公的機関が提供する機会を利用して同年代のロシア人の青少年とコミュニケーションを取ったり、実際にロシア語が使用されている場所を訪れたりすることは、15歳から18歳という年齢の子どもたちにとって非常に強烈な体験となり、人間形成という点で見ても大きな意義を持つことは疑いない事実である。ロシア語を学ぶ高校生の数が、現在のところあまり多くないという事情も考える必要はあるだろうが、考えが柔軟で高い適応能力を持つ高校生が、日本にとってもっとも近い隣国の一つである国に暮らす同年代のロシア人の青少年と積極的に交流し、コミュニケーションを取り、長く続く友情をはぐくんでいくことができる機会は、もっとたくさん開かれるべきだろう。それは、今後の日本の将来にとっても、非常に大きな財産となるはずである。

(都立北園高等学校・関東国際高等学校・早稲田大学高等学院非常勤講師)

付録

①アンケート調査は、都立北園高等学校、関東国際高等学校および早稲田大学高等学院でロシア語を学んでいるすべての生徒 94 名を対象に、平成 24 年 6 月末から 7 月上旬にかけて行った。以下の 13 の項目を立てた質問用紙を配布し、授業時間中に記入してもらった。

1. あなたの年齢を教えてください。
2. あなたがロシア語を学び始めた年齢は何歳ですか。
3. あなたがロシア語を学んでいる(学んだことのある)教育機関はどこですか。またその教育機関の所在地はどこですか。複数ある場合は、時系列順に並べてそのすべてを書いてください。
4. あなたはどのくらいの期間、ロシア語を学んでいますか。
5. あなたがロシア語を学んでいる時間は、多いときで一週間に何時間ですか。1 時間を 60 分間として計算してください。
6. あなたがロシア語と向き合う態度について教えてください。
かなり積極的である・積極的である・ふつう・消極的である・できれば学びたくない
7. あなたがこれまでロシア語を学んできた結果に得られた到達度を、自己評価してください。
よく身に付いていると思う・だいたい身に付いていると思う・分からないところが多い・難しくても分からない
8. あなたがロシア語を学び始めたきっかけは何ですか。具体的に教えてください。
9. あなたがロシア語を学ぶ目的は何ですか。
10. ロシア語を学んでいるということは、あなた自身にとってどのような影響がありますか。
11. もしあなたの周囲に「ロシア語を学んでみようかな」と迷っている人がいたとしたら、あなたはどのようなアドバイスをしたいですか。
12. みなさんは大学以外の教育機関でロシア語を学んでいるわけですが、人生の今の時期にロシア語を学ぶことに、どのような意義があると考えますか。
13. そのほか、書きたいことを自由に書いてください。

②アンケート調査は、平成 25 年 9 月 3 日と 5 日に都立北園高等学校の第一学年 17 名および第二学年 9 名の計 26 名を対象に、以下の項目を立てた質問用紙を配布し、授業時間中に記入してもらった。

1. あなたは、教室外(授業外)でロシア語あるいはロシアの文化を「実体験」したことはありますか。

はい・いいえ

以下は 1.で「はい」と答えた人に対する質問です。

2. それは、学校の先生の紹介によるものですか。それとも自主的に機会を見つけましたか。

学校の先生の紹介・自主的に機会を見つけた・その他()

3. あなたがこれまでに「実体験」した、ロシア語あるいはロシアの文化について、①ロシア語を使う「実体験」(例:ロシア人と実際に出会う・コミュニケーションをとる、ロシア語でスピーチをする)②ロシア文化の「実体験」(例:コンサートやバレエを鑑賞する、ロシア絵画の展覧会に出かける、ロシア文学を読む、ロシア映画を観る)に分類し、それぞれ具体的に記述してください。また、覚えていればそのときの年齢も記述してください。

4. 3.で「①ロシア語を使う『実体験』」をしたことのある人に質問します。①「実体験」前、②「実体験」をしているとき、③「実体験」後 のそれぞれの場面で、自分の中で何らかの気持ちの変化はありましたか。3.で複数回答した場合は、すべての場合について記述してください。

5. 3.で「②ロシア文化の『実体験』」をしたことのある人に質問します。①「実体験」前、②「実体験」をしているとき、③「実体験」後 のそれぞれの場面で、自分の中で何らかの気持ちの変化はありましたか。3.で複数回答した場合は、すべての場合について記述してください。

Seeking Opportunities to Meet with Russians of the Same Generation
—A Case Study of School Support Efforts
for High School Russian Language Learners in Tokyo—

Tomoyo FUKUDA

Currently, Russian is being taught at three high schools in Tokyo. In order to increase the motivation to learn Russian, school officials have been making efforts to provide their students with opportunities to interact with Russians of the same generation. This article describes the present situation, problems, and prospects of interactive activities between Japanese high school Russian language learners and young Russian native speakers.